

個人

寒風沢へ来て、島の現状を見て欲しい

塩竈市

外川 晴信、外川 栄子、長南 正義 個人

取材日 2013.07.17

外川氏は民宿経営・漁師、長南氏は漁師をしている。寒風沢は宮城県塩竈市浦戸諸島最大の島。江戸時代に伊達藩の江戸廻米の港として栄え、当時の繁栄の歴史が語り継がれた文化財の指定も多い。産業は漁業、農業や観光（民宿等）。東日本大震災では島ならではのコミュニティと循環が活かされ、救援が来るまでの約1週間を凌いだ。

3月11日 14時46分

【外川さん（栄）】外にいる時、ものすごく強い揺れの地震が来た。1978年の宮城県沖地震を経験したが、その時の揺れとは比べ物にならない揺れだ。「これは尋常ではない」と思った。家にいる母が心配になり、家まで走った。道路脇の電信柱は柳のように揺れている。自宅前にあった島唯一の商店が地震で倒壊していた。状況が良く分からず、無我夢中で家に戻ると、茶箆筒が母の上に倒れそうになっていた。地震が来る前にたまたま付けた家具転倒防止チェーンがなかったら危なかったと思う。

津波を経験した事はなかったが「津波が来るかもしれない」と感じた。位牌と権利書を持ち、すぐに母と近所のおじいさんと一緒に避難所へ向かった。近くの避難所の旧浦戸第一小学校は水道や電気がないので、おじいさんの事を考え、別の避難所であるお寺を選んだ。ところが避難所へ向かう途中、第一波なのだろうか、真っ白い波が見えた。津波を初めて見たからか、夢中だったからなのか、不思議と恐怖心は無かった。真っ白い波を見て「危ない！」と感じ、危機一髪で津波から逃れた。今考えると本当にあと何十秒かの違いで危なかったと思う。

【長南さん】海の上で牡蠣収穫の最中だった。30ケースほどの収穫が終わり、すでに終盤だ。少しぐらぐらと揺れたので、最初は「地震だな。結構大きいかな」と思った。すると、海がぼこぼここと沸騰してきた。地震の揺れでさざ波のように海が波立ってきたのだ。これまでそうした海の様子を見た事がなかったので「おかしいな」と感じた。その瞬間にぐらっぐらっと大きな揺れが来た。内湾では支柱柵式で、船を竹の支柱にくくって牡蠣を獲っている。支柱につないでいる時に大きな地震が来ると、船と一緒に海に巻き込まれてしまうので、すぐにもやい綱（支柱と船とつなぐ綱）を切らなければならない。そのまま船をもやっている（つないでいる）と、揺すられて根こそぎ持っ



外川 晴信さん

ていかれるからだ。いかだも牡蠣の種も海に沈んでしまった。船がぐっと引っ張られたので「このままでは危ない」と思い、もやい綱を切った。周りを見渡すと崖が崩れている。1978年の宮城県沖地震を経験しているが、このような揺れは経験した事がない。怖かった。「おどげでねえ事が起こる（大変な事が起こる）」と感じたので、揺れが収まって、船に積んでいた牡蠣をすべて海に捨てた。家で作業をしている女性たちが心配になり、急いで帰った。陸に帰ってきた時には岸壁が1m近く地盤沈下していた。「絶対に津波が来る」と感じた。家に戻って、位牌と防寒用のレインウェアを持ち、高台に避難した。

【外川さん（栄）】高台にある旧浦戸第一小学校に避難し、入り江に何度も津波が来ているのを見た。地震から津波が来るまで30分くらいだったと思う。第一波は真っ白いきれいな波だったが、この辺りでは第二波が大きく、後の波は全て真っ黒だった。栈橋は津波にさらわれてしまい、防潮堤の上には知り合いの船が乗っかっていた。多くの島民がすぐに高台に避難したが、船を安全な場所に移すため海に出た方がいて、波の渦に巻き込まれてしまった。私達は助ける事もできず、高台から見ているしかなかった。その方はたまたま浮遊物につかまる事ができて助かった。また、避難し

てから葉を取りに家に戻り、津波に巻き込まれ、たまたま山に流されて助かった人もいます。

島ならではのコミュニティと循環

【外川さん（栄）】寒風沢は北区、中区、南区に分かれている。地震の翌日、明るくなってから消防団が様子を見に行った。消防団の皆が「南は全部無くなったんだ、何もねえ」と言ったのを聞いて「きっと海沿いに建っている自宅は無くなってしまったんだ。夫が不在だから、消防団の人、気を遣ってうちのこと言わないんだな」と思った。

【外川さん】地震が来た時は鳴子にいて、3日目に寒風沢へ帰ってきた。塩竈から寒風沢まで出る船はなかったので、松島にある姉の家へ行って船を借りた。

【外川さん（栄）】3日目に自宅へ戻ると、奇跡的に家が残っていた。もちろん家の周辺や家の中はヘドロや瓦礫だらけだ。ワカメの作業場の上にはどこかの家の2階部分が乗っかり、自宅前の道路にも流されてきた家の2階部分がほとんど落ちていた。

【外川さん】自衛隊が来たのは、地震から1週間くらいたってからだ。寒風沢では電気も水道もストップしたが、皆で協力して食べ物を持ち寄り、不自由する事はなかった。米やみそ、野菜は自分で作っている。備蓄まではいかないと思うが、1年間は食べていける米やみそなどが取ってある。津波で濡れてしまったが、家に米はあったので避難所に持って行って皆で食べた。また、冷蔵庫や冷凍庫は開けなければ1週間ほど中の食材が大丈夫なようだ。プロパンガスのボンベを煮炊きに使い、島ではガソリンや灯油をドラム缶で買っている。瓦礫の中から探し出して1か所に集め皆で使った。しかし、水には困った。塩水を真水に変える装置が島にあるが、飲むのは抵抗がある。洗い物などに使用し、防火用井水にストックしていた水を飲料水に使った。

【長南さん】島ではほとんどの家が漁業をしているので、各家庭に冷凍庫が必ずあり、家で魚を冷凍している。私の家でもその日まで牡蠣剥きをしていたし、米は作っている。食生活には困らなかった。島というコミュニティで成り立っている。もちろん非常時にはいろいろな人間模様が見えた。それは仕方ない事だと思うが、それらをまとめるリーダーは本当に大変だと思う。

【外川さん（栄）】自衛隊が来るまで島ならではの



外川 栄子さん

循環が活きたと思う。避難所でも普段と変わらない温かいおにぎりやみそ汁をいただいた。電話はつながらなかったものの、大きな発電機があったので、体育館に電気を引っ張って、テレビを見る事もできた。非常時には島の方が良いところもあるのではないかと考えた。

【外川さん】1週間以上、島民全員でご遺体の確認をした。船が残っていたので海は瓦礫だらけだったが、船で塩竈市の市役所へ行って寒風沢の様子を報告した。地震から1週間くらい経ち、自衛隊がヘリコプターで食料を運んでくれた。また、ホバークラフトで迎えに来て、沖に停泊している輸送船のブルーシートで作ったお風呂に入らせてくれた。お風呂には1ヶ月以上入る事ができなかった。久しぶりに入ったお風呂は極楽だった。ありがたいと思った。自衛隊は1ヶ月以上、島で捜索をしていたと思う。

10日ほどで避難所から自分の家へ戻った人もいます。片づけのため家に帰る人、発電機を買ってきて自分で電気を確保する人もいた。うちも自宅2階は大丈夫だったので、2階で寝泊まりし、朝晩は避難所にご飯を食べに行った。電気は復旧まで1ヶ月以上かかり、水道は2ヶ月近くかかった。2ヶ月ほどが経過し、だんだんとボランティアが来るようになった。この島ではボランティアが来る事は初めてだったので馴染みがなく、最初は「何とか自分達でやっから」と断っていた。申し訳ないと思ったからだ。しばらくそうした状況が続いたが、ボランティアの方々は何度も島へ来た。毎日1人で片づけなどをしていたので、大勢のボランティアの方々の「何でもやっから」という気持ちが嬉しく、ありがたかった。最初は食料も確保できず、お風呂もなかったので、泊まり込みでボランティアをする事はできなかったが、定期船が動くようになってからはボランティアの方々が頻繁に来るようになった。もしも自分がボランティアに来てもらう立場ではなく、逆の立場だったら、

果たして自分に行けるのかなと自問した。日本人には良いところが残っていると感じた。

東日本大震災による海の変化

【外川さん】震災後は2012年から海に潜っているが、大きな石や海藻が無くなってしまった。島の陰には海藻などが残っているが、津波が来たところはまっさらになっている。アワビは大きな石の下などに隠れるので、まっさらな状態ではアワビが付かない。島では5人が素潜りをしているのだが、産業としての危機感を抱いている。いろいろな養殖ならば何とかなるかもしれないが、自然を相手にしている潜りの我々にとって現在の海の状態は非常に厳しい。

【長南さん】震災以降、内湾が富栄養になっている。沖合の泥が流れ込んできたため泥質が変わった。これまでは見た事がなかったツチクジラが湾淵辺りにいる。内湾まで入ってくるなど、これまではない事だ。ワカメは少し増えたが、カジメなどが全部無くなってしまい、アワビが付きそうもない石になってしまった。また、ウニがいないので、雑ものを食べてくれない。潜水した時、石を伝っていくとアワビがいて、蜘蛛の巣がはった時（磯が汚れている状態）はウニが雑ものを食べ、ウニをどかすとアワビがいる環境が良い海の環境だ。どれか1つ欠けても駄目なのが自然だ。ウニは草を食べてしまうので邪魔だと言う人もいる。確かに邪魔する事もあるが、補ってくれるところを尊重した方がいい。

寒風沢が抱えている課題

【外川さん】現在、寒風沢に残っているのは仮設住宅を含めて50軒だ。塩竈市に避難した方々が戻って来られない状況が一番の課題である。歳をとったり、病気をしていたりして、島にいと緊急の場合は対応できないので、高齢者は安心して暮らす事ができない。お墓参りにいつでも行けるようにと、お墓を寒風沢から塩竈に移した方もいる。寒風沢に戻りたい気持ちはあるようだが、島の復興住宅は申込みが無いようで、避難した方々が戻ってくる可能性は少ない。おそらく若い人が戻ってくる事もないだろう。寒風沢に魅力ある産業が無くなってしまったからだ。震災以前は海苔と牡蠣と刺網漁が盛んだった。刺網漁の船は全部残っているが、海苔の機械は津波で駄目になってしまった。「もう一度、海苔をやりたい」と言う島民はいるが、設備を整えるためには莫大な資金が必要だ。いかだや網が流され



長南 正義さん

てしまったので、すべてそろえるには1億円以上かかる。3人で協業すれば、全体の約8割の融資を受けられるのだが、海苔事業に携っている島民は皆67歳前後だ。後継者がいれば違ったのだろうが、やりたい気持ちはあっても、この先の返済がネックになり、再開する事ができず、海苔の事業をしていた人は全員やめてしまった。現在、寒風沢の最若手事業者は牡蠣を事業にしている54歳だ。

次に防潮堤の問題だ。今回の震災のように津波を見てから逃げた人も大勢いる。もしも見えていなかったら、うちの母ちゃんは巻き込まれていた。防潮堤を高くしたら、波を見る事ができなくなる。海が見えないとおっかないし（怖いし）、かえって危険ではないか。岩手県田老の防潮堤でも津波を防げなかったのだから、もはや防潮堤では防げないと分かったはずだ。命があればよいのだから、財産はともかく、とにかく逃げる。地震が来たら、海を見て逃げる。津波が来たら、逃げるしかない。寒風沢は震災により沈下した漁港用地等のかさ上げ整備が復興計画に盛り込まれている。防潮堤が高くなれば、道路もかさ上げされる。それで、住宅地を低いままにしておくと、ポンプで排水する必要が出てくる。しかし、かさ上げには資金も労力もかかる。家の中の物を全部出して、床を壊して高くしなければならない。私の家も土地をかさ上げするために、1年近く空き家に住んでいた。それを80歳の島民にやれと言うのは無理がある。また、防潮堤と一緒にエプロン（接岸施設の水際線から上屋または野積場に至るまでの平坦な場所。）も高くする計画だそう。エプロンが高くなると、干潮時に船への乗り降りや荷揚げができなくなってしまう。使いやすいようになるなら良いのだが、これから歳をとっていくのに、おどげでねえ（大変な）事だ。住民の意向としては、現状を保ちながら水が上がらないようにしてほしい。

【長南さん】千年に1度と言われている大津波を防がなければならないのも分かるが、使い勝手の良いようにしてほしい。住む人が便利でなければ、誰のためか分からない。朝起きて海の様子を見てから今日の仕事の事を考える。海の様子が見えてなんぼの世界だ。島に来て海が見えないのもどうかと思うし、防潮堤ができれば閉じ込められた気分になると思う。また、これまで簡単に海へ出入りしていたが、防潮堤を大きくすれば人の手では水門が開けられなくなってしまう。島は高齢者ばかりなので大変だ。さらに、護岸整備と同時に避難経路も整えないと、もし今津波が来たらどうするのだろうかと考えてしまう。島だけの力では予算も人手もないので、できる事は限られているが、ある程度同時に進めなければならないと思う。寒風沢は震災前から課題が山積している状態だった。そこに震災が来た。元の状態に戻すのか、元の状態よりランクアップするのか。早く元の状態に復旧するのが先決だと思っている。現状は時間とお金をかけすぎではないだろうか。また、護岸整備などハード面ばかりが優先されて、生活基盤の産業が復興していない。第一次産業で食べているので、産業が復興しないと島にいる意味がなくなってしまう。牡蠣の産業は震災の年から何とか復旧し、1年目は頑張れたが、2年が経過し、牡蠣に従事する人は半分に減ってしまった。元の状態に戻してくれれば、塩竈市に避難した方々の中にも島へ戻る人がいるのではないと思う。しかし、戻ろうと思っても島の復興が進まなければどんどん先延ばしになり、避難先で生活基盤が固まってしまうのではないかと。復興計画などは大きく掲げられていても、現地では復旧復興が全然進んでいないように感じる。動いてはいるのだろうし大きなビジョンも必要だが、現在も自分達の生活は続いているのだから、住む人達に見えるようにしてほしい。

大震災を振り返って

【外川さん】地震が来たら、とにかく何も持たずに逃げる。それが大事な事だ。また、今振り返ると、米などの備蓄をしていた方が良かったと感じる。大震災という非常時に島で確立していた循環が活かされた。これからは島の良いところとして、寒風沢ならではの循環を守らなければならないし、活かしていかなければならない。これから寒風沢へいろいろな方に来て、泊まっていただき、島の現状を見て、話を聞いてほしい。島民は海が見えるのが寒風沢らしいと思っている。海が見える事がどれだけ大事かは、見てもらわないと分からない。

【長南さん】寒風沢では11世帯が仮設住宅に住んでいる。夏は暑いし、冬は寒いし、絶対にストレスは溜まる。それが2年半も続いている。仮設住宅は避難生活の延長と言っても過言ではない程の大変さがある。震災で家や財産など全てを持っていかれ、生産もかなわないと思い、一時は島を出る覚悟もした。しかし、震災直後から早く自分の生活を立て直したい一心で、とにかく生産をしようと牡蠣養殖を1年目で再開した。海の中でヘドロ状態になっている種牡蠣の種子を探して、隣の島の方と組んで、桂島の処理場に通った。生活が成り立ったわけではないが、現在はこうして家族と頑張っている。おそらく島を出てしまっただけは何も残らなかっただろう。津波はどうしようもないと思っている。小さな不平不満は数えたらきりが無いが、それよりも早く元の生活に戻りたい。現在は自分の生活の立ち上げが一番だ。外川さんのように早く自分の家を建てたい。

牡蠣養殖に携わって10年以上になるが、産業的にはもう勢いが無い。今後は加工して付加価値をつけて売っていかねばならないと思っている。寒風沢のブランドも考えていきたい。地域性と閉鎖性はイコールだと思うので、時代の流れに合わせて、自分で切り開いていかねばならないと感じる。人を呼ぶ工夫も必要だ。こちらからも積極的に出ていき、寒風沢の良いところを上手くPRしたい。地元では当たり前すぎて見えない事も、外から来た人にとっては魅力的かもしれない。島に来た100人のうち1人でも興味を持ってくれ、やる気を出し、漁師をやりたいと言う人がいるかもしれない。そうしたある程度オープンな体制を作らなければ、寒風沢を含む浦戸諸島は生き残れないと思う。これから「したい」事はいろいろあるが、生活していくためには1人ひとりが生活の基盤を整えていかねばならない。先を見て頑張るしかない。まずは少しずつでも前と同じサイクルで仕事ができるように、良い方向に変わっていけば良いと思う。



撮影：2013.6.29 宮城県塩竈市寒風沢 島へ来たボランティアの様子